古文書倶楽部

【発行】
秋田県立図書館
古文書班
2005. 3
第1号

創刊にあたって

この度、古文書班では「古文書倶楽部」を刊行することに致しました。「絵図」・「渋江和光日記」・「年間事業」などのほかに、私どもが仕事をしていく中で、お伝えすれば参考になると思われることを、短い文章で紹介することに致しました。今年は4回程度、刊行したいと考えておりますが、紙面の作り方などについての意見を参考にしてよりよい「倶楽部」を発行していきたいと考えております。

「大塩平八郎を捕まえろ！」

渋江和光日記
刊行本・第11巻
〈3月〉より

天保八年三月二十二日、秋田藩御相手番渋江和光は、幕府からの通達である「大塩平八郎の乱」首謀者六名の人相を日記に書き留めています。

大坂町奉行所の元与力であった大塩平八郎は、天保八年二月十九日飢えに苦しむ大坂の市民を救うべく、「救民」の旗を掲げ、鴻池屋その他の豪商を襲う行動に出ました。大坂町奉行所の鎮圧により乱自体はその日の内に収まりますが、大塩平八郎自身は行方をくらましました。幕府は潜伏した大塩平八郎を探すために、全国に指名手配を出したのです。

渋江和光の日記にある大塩平八郎の人相は次の通りです。

一年齢四拾五六歳、顔細長く色白き方
一眉毛細く薄き方
一額開き月代青き方
一眼細くつり候方
一鼻常躰
一せい常躰中肉
一言舌さハやかにて尖き方、其節之着用
一鍬形付甲着用
一黒き陣羽織
一其余着用不分
ちなみに平八郎の子の格之助の人相は次のようにあります。
一年齢弐拾七歳斗、顔短く色黒き方
一せい低き方
一鼻常躰
一眼常躰
一眉毛厚き方
一歯上向き、歯弐枚おれ有之
一言舌静なる方
一其節之着用不分

逃亡中の大塩が「くわがたのかぶと」や「黒き陣羽織」を着用しているとは思われず、この人相書きで犯人を特定するのは難しそうです。

結局、大塩親子は三月二十七日に大坂市中の町屋に潜んでいるのを発見され、捕縛に向かった役人が踏み込む前に自刃しています。

日本史の教科書で必ず登場する「大塩平八郎の乱」。遠く大坂での事件は秋田藩士の日記にも記されていたのです。

（畑中）

知っておきたい歴史用語

「在々給人」ざいざいきゅうにん

「在々給人」とか「在郷給人」とは、久保田城下居住の給人に対する呼称として使用されております。在とは在郷の略で「いなか」とか「農村」を意味しております。また給人とは、年貢の徴収を認められた土地を主君から給せられた武士のことをいいます。在々給人は、北の十二所から南の院内までの秋田六郡のなかで、領内統治の重要な所に配置されております。それらの所には大身の「所預」（ところあずかり）なども置かれているために、在に居住する給人を、「所預」などの家来であると理解しているように見受けられる場合もあります。

だが、給人は彼らの家来ではなく、「在」に居住する藩の直臣（じきしん）のことを意味しております。「在々給人格式」（佐竹宗家ＡＳなど）という史料によれば、主君の側に伺候する時や代々受け継がれた家督相続の際には、御前に召し出されて盃を頂くということになっております。直臣であるから、御前に召し出されるのです。ところで、大身の「所預」は、彼ら個人の家来を持っております。「陪臣（ばいしん）」記録留書写」（佐竹西家ＡＯ）では佐竹北左衛門家人と記されております。この家人が北家の家来で、佐竹宗家からみれば、陪臣＝又者（またもの）になります。直臣である給人と又者を混同しないようにしたいものです。

（菊池）

古文書こぼれ話

古文書の解読作業中、意表を突く当字（あてじ）や作字（つくりじ）と出会って戸惑うことが少なくない。

「**従腹**」とは「しょうふくー承服」のこと、「**日外**」は「いつぞや」、「**頓而**」は「やがて」と読む。「はかない（儚い）」は「**墓ない**」、「難し」は「**六ツ借し・六ツケ敷**」とも書く。現代の用字用語辞典とは大違いである。しかしそれは単純に人々の無教養を示すものではない。言語の文字表記については、昔の人々の方が今よりずっと自由で、切実で、しかもおおらかな感性を持っていたことの証左ではないだろうか。これまで古文書でたびたび出会った昔の用字・用語を真似て恥ずかしながら私も日記に小文を綴ってみた。

「二月某日、外は**凪**（ふぶきー吹雪）で**大思止**（大おもやみ）だったが散歩に出た。遠くから**躬**（せがれ）の引く**轉**（そりー橇）で遊ぶ孫の歓声が聞こえる。**風与**（ふと）空を見上げると白鳥の群れが美事（見事）な編隊を成して北に向かっていた。**鳥渡**（ちょっと）立ち止まり、俳句の一句でもと苦吟する。詩歌を**等閑**（なおざりに）してきた**白人**（素人）の身には**六ツ借し**（難し）かった。**あらき酒**（焼酎）を愛し俳句も得意な某君が**浦山しい**（羨ましい）。」ご笑読　**穴賢**（あなかしこ）。

（柴田次）

お知らせ

『渋江和光日記』第十二巻が刊行されました。この巻には天保九年（一八三八）十月から天保十年（一八三九）十二月までの日記がおさめられており、この巻をもちまして渋江和光日記の刊行は終了になります。

最終巻となるこの巻には、日記の特徴やみどころ、和光、和光をめぐる家々の系図等を記した**解題**も掲載されています。はじめてこの日記を読まれる方は、この解題を最初にご覧になることをおすすめします。

『渋江和光日記』は、県内の図書館で閲覧することができます。（書店では販売しておりません）

（後藤）

〈編集後記〉

「古文書倶楽部」創刊号いかがでしたか？

今回は初めてパソコンで「凪」などの造語を作るのにチャレンジしました。皆さんも昔の人のように日常の感じたままを漢字で表現してみませんか？

（内藤）